

## 《通販よもやまばなし》

### 第2話 今の通販、百年前の予測ほど進んでない？

今から百年ほど前、正確には116年前の1901年（明治34年）の報知新聞に、「百年後の未来予測」が掲載されました。この記事についてはほかでも紹介されているので、詳しい内容は省きますが、例えば、東京―神戸間を2時間半で結ぶ弾丸列車が実用化するとか、自動車が全国で数台しかない時代なのに自動車専用道路や大気汚染を予測するなど、なかなか的中率です。また、ライト兄弟による初飛行の前年にもかかわらず、百年後には7日間で世界一周でき、男女を問わず1人1回以上世界旅行する時代が来ると予想しています。

では、「通信販売」については、どんなふうに予想していたのでしょうか？

郵便制度の普及で、明治時代にはすでにメールオーダーによる通信販売はすでに行われていました。それが、大恐慌や戦争の影響で萎んでしまい、戦後に復活するのですが、このへんの事情については別稿にゆずることにしましょう。ただ、当時の通販は便利な買い物もの仕方とはとうてい言えなかったとみえて、百年後には「誰もが遠距離にある物の品定めができ、地中の鉄管を通して配達される」と予想したのです。

この予想の前半分、「遠距離にある物の品定め」は、パソコンやスマホの画面や情報で、今ではラクラクできるようになりました。しかし、問題は後半、「地中の鉄管を通して配達」の部分、つまり「水道」でどこでも水が飲めるように、通販で注文した商品が送られてくるという予想（あるいは願望？）は、大きく外れてしまいました。

どんなに出荷作業がシステム化できても、最終段階のお届け作業は、配達員が「手押し車」で汗水たらしているのです。まるで百年前と変わりありません。ドローンや配達ボックスで配送問題は解消されるでしょうか。とてもそうは思えません。

大きく進歩、発展したように見える「通販」も、「理想形」からはほど遠いのです。ITだけでは解決しない、改良、工夫の余地がまだまだ残されていることを私たちに、百年前の予測が思い知らせてくれているようです。